

霧原骨董店

～あやかし時計と名前の贈り物～

松田詩依 Shiyori Matsuda



アルファポリス文庫

目次

プロローグ	5
第一話 懷中時計	8
第二話 テディベア	45
第三話 白無垢	114
第四話 神鏡	190
エピローグ	267

プロローグ

「かわいそくに。このままじゃ、お前はずつとひとりぼっちのままねえ……」
皺くちやの手で、祖母が僕の頬を優しく撫でる。その表情は悲哀に満ちていた。

「お前は優しい子だからねえ……人に迷惑をかけないように、わざと周りと距離を置いているんだろう？ 誰とも関わらないのは確かに楽かもしれない。でも誰の記憶にも残ることなく、好かれることも、嫌われることもなく、関心も持たれないままずっと生きていくのは……あまりにも酷だ。私にやとても耐えられない」

哀れむように。慰めるように。慈しむように。

祖母は片方の手で僕の手を強く握りしめながら、もう片方の手で別れを惜しむように頬や頭を撫で続けた。

祖母の掠^{かす}れた声は言葉を発するたびに弱まり、瞳からは生気が少しずつ消えていく。それでもなお話し続ける祖母だが、僕の頭は上手く働かず、それらの言葉を拾えない。なにか大切なことを伝えているはずなのに――

「その、引き出しに入っている……時計を取ってくれるかい？」

祖母は意思に反して閉じようとする瞼^{まぶた}を無理矢理にこじ開け、震える手でベッド横のチェストを指さす。

はっと我に返り、急いで引き出しを開けると、それはすぐに見つかった。

祖母が長年愛用している、金色の手巻き式懐中時計。至るところに小さな傷がついている古い物だが、祖母は毎日ゼンマイを巻いて大切に使い続けていた。

懐中時計を取り出し祖母に差し出すと、祖母は両手で時計ごと僕の手をしつかりと包み込んだ。

「……お前が持っていておくれ。大切に使えば、きつと……いいことがあるはずだよ」
うわ言のように呟^{ささや}かれる言葉に、僕はただただ頷くことしかできない。

祖母は僕の頬に優しく触れて、悲しげに微笑んだ。

「一樹^{かずき}。可愛いお前をひとり残して逝^いくのが……ばあちゃん、本当に心配だよ。どう

か、どうか、幸せになっておくれ……」

絞り出すようにそう告げたあと、祖母の手は布団の上にはたりと落ちた。目からは涙が一筋流れ、それと同時にゆっくりと瞼が閉じられる。

皴^{しわ}の刻まれた手を握り、冷たくなっていく体温を感じながら、祖母は逝ってしまったのだと理解した。

そうして僕は、本当にひとりきりになってしまったのだった。

第一話 懷中時計

僕——高峰一樹は、幼い頃に両親を亡くし、唯一の身寄りであった祖母と二人で暮らしていた。

小さな田舎町での、決して裕福ではない生活。けれど、それを不満に思ったことはない。家事や畑仕事を手伝い、高校に入るとアルバイトをして家計を助けながら、祖母と仲よく二人三脚でやってきた。

持病があった祖母のことを思い、高校卒業後は地元で就職するつもりだった。

ところがその旨を伝えると、私のことなんて考えなくていいから大学に行きなさい、と祖母は顔を真っ赤にして僕を叱った。

ウチにはそんな金ないじゃないか——そう反論する前に祖母が出してきたのは、両親が残してくれていたという、僕名義の預金通帳。そんな物を見せられたらなんにも

言えず、僕は急遽、就職から進学へ進路を変更したのだった。

それから大急ぎで進学先の資料を集め、色々と考えた結果、ある地方都市の大学を受験することにした。そしてなんとか合格通知を手にして新居も無事決まり、あとは引越すだけ——そう思っていた矢先に祖母が倒れ、その数日後に亡くなった。

まるで僕が巣立つ準備を終えるのを見計らっていたかのような、絶妙すぎるタイミングだった。

こうして唯一の肉親を失ってしまった僕は、悲しみに暮れる暇もなく、祖母と暮らした田舎から遠く離れ、この町で新たな生活をはじめたのだ。

僕の一日は、祖母の形見である懷中時計のゼンマイを巻くことから始まる。

今日の授業はなにがあったっけ。あの課題はいつまでだったか。そういえばシャンブーがなくなりかけてたから、買いに行かなきゃな——朝目が覚めるとそんなふうに一日の予定を立てながら、童頭を回してゼンマイを巻く。

金無垢のチェーンがついた、片面開閉式の古い懷中時計。

掌にちょうど収まるくらいのサイズだが、ずっしりとした重量感がある。蓋や側

面には花や鳥といった和風の装飾が施^{ほどこ}されていて、使い込まれたなめらかな手触りだ。蓋を開くと白い文字盤が顔を出し、そこにはアラビア数字がぐるりと並んでいる。

こういった物に詳しくない僕でも、この懐中時計が如何^{いか}に古く、高価な物かは想像がつく。それに、祖母がどれだけこれを大切にしていたかはよく理解していた。

『この時計には守り神が憑^よっていて、持っているると幸運を運んでくれるんだよ』生前の祖母はそう言って、どこへ行くにも肌身離さず持ち歩いてきたほどだ。

『守り神が憑^よいている』という祖母の言葉を信じているわけではないが、持つと手によく馴染^{なじ}み、妙に安心する。気がつくとい僕は、この時計をお守り代わりに持ち歩くようになっていた。

ただし、この時計はもう、時計としての役割を果たしていない。祖母が息を引きとった瞬間から、時を刻むのをやめてしまったのだ。

それでも僕は、毎日欠かさずゼンマイを巻いている。いつかまた針が動き出すことを願^{ねが}って――

今日もゼンマイを巻き終えた僕は、ベッドから出て床に足を下ろした。

このアパートは家賃の安さを重視して選んだため、築年数はそこそこ経っている。

それでもフローリングや壁紙は新しく張り替えられていて綺麗だし、風呂とトイレは別で、エアコンもついていた。

手早く準備を済ませて部屋を出ると、自転車に跨^{またが}り緩やかな長い坂を下っていく。

自宅から大学までは、自転車で十五分。高校の時は自転車で三十分かけて通っていたので、それを思えば近いものだ。

風を感じながら、流れる景色に目を向ける。

田畑や山々に囲まれていた故郷と違い、視界に入ってくるのは住宅やビルなど建物ばかりだ。

そんなこの町での生活には、今のところ不満も不安もない。けれど、これといった喜びや期待を感じることもなかった。

*

「――と、いうように考えられています。えー……ここまでの話をまとめると……」

大講義室に響き渡る教授の声に耳を傾けながら、僕はシャープペンシルを回して眠

氣と必死に戦っていた。

一年次の必修であるこの授業にはほとんどの学部生が出席しているため、大講義室は学生で溢れかえっている。

これだけの人数がいても、真面目に授業を受けているのはほんの一握りの学生だけ。眠っていたり、携帯をいじっていたり、それなりに大きな声で雑談を交わしている者もいる。

そんな中、教壇に立つ教授は彼らに注意もせず授業を進めていく。きっとこの騒音にも慣れてしまっているのだろう。

欠伸を噛み殺して息を吐くと、どんと肩に衝撃が走った。手の中からシャープペンシルが落ちて、床を転がっていく。

「あ、わりい。ぶつかっちゃったか？」

その声に右を向くと、隣の席で友人達とふざけ合っていた男子学生が僕を見ていた。「……いや」

シャープペンシルが落ちたのは別に彼のせいではない。彼の後ろに立っているヤツのせいだ。けれどその男子学生は申し訳なさそうに床に落ちたシャープペンシルを

拾ってくれる。

彼の髪は発色のいい茶色で、僕とは正反対の明るく賑やかそうな印象を受けた。

どういう言葉を返せばいいか迷っているうちに、男子学生はシャープペンシルを僕の手に置いてすぐに友人の方を向いてしまう。僕は黙ってシャープペンシルを手に取り、手持ち無沙汰にペン回しを再開した。

横目でちらりと隣を見ると、男子学生は何事もなかったかのように友人達と談笑している。その様子をしばらくうかがったあと、僕はゆっくりと意識を彼から引き離した。

僕は人付き合いが少し——いや、かなり下手だ。

もともとひとりが好きな質ではあるのだが、とある事情で幼い頃から他人と距離を取りがちだった。

その結果、決して人に嫌われることもないが、かといって好かれることもなく、相手の印象にさほど残らない人間に成長した。

高峰？ ああ、そういえばそんなヤツいたよな。下の名前も顔もよく覚えてないけど——といった感じに。

別にそれを嫌だと思ったことはない。ぼっちの生活にも慣れている。そんな僕を祖母はとても心配していたけれど、大丈夫。心配には及ばない。

「授業終わったら飯行こーぜー」

「明日休みじゃん。今晚、カラオケオールしようよ」

「サークルの先輩に告白されちゃった!」

「ごめん、今日合コンなんだー」

前後左右から楽しそうな声が聞こえてくる。

右側に立っていたヤツが、ずずずと僕に顔を近づけてくる。それが近づくにつれて周囲の音がますますうるさくなっていくように感じた。

けれど周りにいる誰も、そいつを気にしている様子はない。当然だ。こんなもの、見えてしまうほうがおかしいのだから。

通路に落ちるそいつの影を見つめながら、僕は俯いて耳を塞ぎ、授業が終わるまでじっと耐えていた。

「――今日の授業はここまで。では、また次週」

耳を突き刺していた学生達の声がただの騒めきに変わり顔を上げると、授業は終わっていた。窮屈で暑いくらいだった教室から続々と学生達が去っていく。

ふとノートをまともに取っていないことを思い出し、教授が完全に消し切る前に慌ててスマホで黒板の写真を撮った。

額に滲む汗を拭って一息つく、荷物をまとめてようやく席を立つ。

「すみません」

背後から凜とした声に呼び止められ、驚いて一瞬足を止めてしまった。しかしよく考えれば、僕に声をかけてくる人間なんているはずがない。構わず足を進めて講義室を出ようとした。

「あの、すみません」

すると今度は肩を軽く叩かれ、同じ声にもう一度呼び止められた。肩に確かな感触とわずかな体温を感じて、パツと振り返る。

「すみません……あの」

そこには、長い黒髪的女子学生が立っていた。

勢いよく振り向いたせいか、彼女はわずかに驚いて目を丸くしている。

スラッとした体形で肌の色は白く、可愛いというよりは綺麗系の大人しそうな女の子だ。ロングスカートに白いブラウスという清楚な出で立ちで、他の女子達とは明らかに違う落ち着いた雰囲気（たやす）を漂（た）わせていた。

僕ですか、と問うように無言で自分の顎（あご）の辺りを指さすと、彼女は丸い瞳に僕を映したままゆっくりと頷いた。

「……な、んでしょか」

話しかけられる理由がまったく思い浮かばず、詰まりつつ返事をすれば、彼女がずっと静かに手を差し出した。

「これ、貴方のですよね」

彼女の手に見覚えのある懐中時計が載せられているのを見た瞬間、あっ、と自然に声が漏れた。

慌ててズボンのポケットに手を入れたが、そこにあるはずの懐中時計はない。いつの間に落としてしまったのだろう。周りの音がうるさくて落としたことにも気づかなかった。

「私、少し後ろの席にいたんですけど。さっき、ポケットから滑り落ちたのが見えた

ので」

「全然気づかなかった……すみません。ありがとうございます」

礼を述べながら懐中時計を受け取るが、彼女の表情はどこか曇（くも）っている。不思議に思っていると、彼女はまた静かに口を開いた。

「蓋（ふた）が開いていたので、中を見てしまったんですけど……その時計、動かなくなっていました。もしかしたら落ちた拍子に壊れてしまったのかも……」

懐中時計を心配そうに見つめる彼女に、僕は小さく首を横に振った。竜頭（りゅうづ）を押して蓋を開け、四時十二分を指したまま止まった針を見つめる。

「これ、もともと動かないんです。時計屋さんに見てもらったんですけど、部品はどれも壊れていないらしくて。お店の人もお手上げだって、返されたんです」

いくつかの時計屋を巡ったが、返答は皆同じ。部品は正常で、動かない理由はわからない、とのことだった。

きつと祖母のあとを追うように役目を終えたのだと、僕は思っている。

「……だけど、祖母が大切にしていた物なんです。拾ってくれて、助かりました」

彼女が引き止めてくれて本当によかったと思いながら、感謝を伝えるように頭を下

げる。

すると頭上から、くすりと笑い声が降ってきた。不思議に思つて顔を上げると、彼女は手で口元を押さえながら笑いを堪えているようだった。

「ふふっ……ごめんなさい。なんだか面白くて。だって、貴方も一年生ですよね」

「え、ええ……まあ」

「それなのに私達、ずっと敬語で喋って……ふふっ」

「そ、そうですね……あ、いや。そう、だね」

そんな些細なことがツボにはまってしまったようで、彼女の口元からくすくすと笑みが溢れていく。彼女があまりにも楽しそうに笑うから、僕も思わずつられて笑ってしまった。

「その時計、本当に大切な物なんだね。きっとその子も喜んでいると思うよ……それじゃあ、また」

時計をその子と人のように呼ぶなんて不思議な人だ。

彼女は小さくお辞儀をして振り返ることなく教室を出ていった。

僕は懷中時計を握りしめながら、その場に立ち尽くす。

誰かと目を合わせて言葉を交わし、ましてや笑うなんて、本当に久しぶりのことだったから。

*

昼休み。ひとり食堂に入ると、そこは沢山の学生達で賑わっていた。

この大学の食堂の天井は高く、大きなガラス窓が並んだ開放的な内装で、お洒落なレストランのような雰囲気だ。

和洋中とメニューの種類も豊富で、味もさることながら、値段が良心的なのが嬉しい。

加えて、テーブル席だけでなくカウンター席も用意されていることも魅力のひとつだ。ぼっちの貧乏学生にとって、ここの食堂は図書館の次に落ち着ける場所だった。

きつねうどんを購入し、窓際にあるカウンター席に座って手を合わせる。

ひとつ空いた隣の席には、美味しそうにオムライスを頬張る女子学生の姿があった。その様子を見ると、オムライスが食べたくなってくる。

どうしてこう、人が食べている物は美味しそうに見えるのだろうか。

明日は僕もオムライスにしようかな、などと考えていると、窓ガラスに映る女性の姿が視界に入った。その女性はこちらを羨ましそうに見つめているような気がしたが、そもそもそんなものは見えるはずがないのだ。僕はそっと視線を逸らしてきつねうどんを啜る。

うどんは柔らかい太麺で、そこそこ厚い三角お揚げを噛むとじわりと甘い出汁が溢れる。少し味が薄いような気もするけれど、学食にこれ以上のクオリティを求めるのは欲張りだろう。

やがて食事を終えた僕は、お盆を窓際に寄せてポケットの中から懐中時計を取り出す。

竜頭を押して蓋を開けるが、やはり時計の針は微動だにしない。時計の側面を軽くとんとんと叩いてみても、当然動く様子はなかった。

じっと見つめてみたところで、どうにもならないことはわかっている。ただ、時折こうして動いていないものかと確認してしまふ。

ゆっくり蓋を閉じると、かちつという音が鳴った。その音が心地よくて、開けては

閉めてを繰り返す。

そして蓋に彫られた朱鷺の模様を指でそつとなぞりながら、小さく溜息をついた。
——やっぱり、なんとか直してやりたいよな。

実はもう一軒、この懐中時計を見てもらえそうな店に心当たりがあった。いつ見ても閉まっている店なのだが、あそこならなんとかしてくれるかもしれない。

今日も帰りに店の前を通ってみようと決めて、僕は静かに席を立った。

*

僕のアパートは少し高台にあつて、大学から帰宅する際には最後に緩やかな坂を上ることになる。その上り坂にさしかかる手前辺りに、異彩を放つ建物があった。

まるでそこだけ時代に取り残されたかのような、瓦屋根の古い木造建築。その軒先には「霧原骨董店」と彫られた、かなり年季の入った一枚板の看板が掲げられている。入口の左右にある出窓からわずかに中を覗けるのだが、照明が点いていない店内は薄暗く、物が沢山置かれていることが辛うじてわかる程度だった。

格子の引き戸は客の来店を拒んでいるかのようにぴたりと閉められており、〃本日ノ営業ハ終了シマシタ〃という札が下げられている。

僕がこの町に引越してきて以来、店が開店しているところを見たことは一度もない。なのに何故僕がこの店に期待を抱いているかというところ、その理由は店先の張り紙にあった。

——いわく憑^つきの骨董品の出張買取・修理・お祓^{はら}いなど承^{うけたまわ}ります。お気軽にご相談ください。

張り紙に書かれたそれを読む限り、この店は相当変わっていると思える。〃いわく憑^つき〃お祓^{はら}い〃などの言葉に引^ひっかけかりを覚^しえるが、注目したいのは〃修理〃の文字だ。

どこことなく不思議な気配を放つこの店ならば、祖母の懐中時計を直してもらえようないない気がしてならない。

閉ざされたままの格子戸が開いている時があれば、足を踏み入れてみよう。そんなことを考えつつ、今日も閉まったままの店の前を自転車を通り過ぎたのだった。

*

数日後。図書館で課題をこなして大学を出た頃には、すでに外は薄暗くなりかけていた。

アパートへ続く坂道にさしかかろうとした時、疲れのせいかなんだか今日は最後まで上りきれないような気がして、自転車を押して歩くことにする。

坂の手前で自転車を降り、ふと目の前にある骨董店に視線を移した瞬間、自分の目を疑った。

「嘘^{うそ}だら」

いつもはぴつたりと閉められている格子戸が開いており、あろうことか店内に明かりが灯^{とも}されていた。

何度か目を擦^{こす}って確認したが、やはり僕の見間違^{まちが}いではなく、店の戸は開いていた。引き寄せられるように入口に近づいて中を覗き込んだ。温かな色の電球に照らされた店内には、沢山の骨董品が所狭しと並んでいる。

「すみません」

恐る恐る声をかけてみたが、声が反響しただけで返事はなかった。けれど、こうして電気が点いていて入口も開いているのだから、開店していることに間違いはないだろう。

「失礼しま……す」

店に入って真つ先に目に留まったのはレジ台だ。入口のすぐ左側に、年季の入ったアンティークのレジスターが置かれている。

レジ台の奥には、長方形のローテーブルを挟んでロングソファが置かれているのが見えた。その周囲にもごちゃごちゃと物が置かれていて、さらに奥には大きめの窓がある。

一方、入って右側は商品の陳列スペースのようだ。

こちら側に窓はないが、天井から吊られたシャンデリアや様々な種類の照明が棚に並んだ商品をほんやりと照らしていた。

人がぎりぎりすれ違えるくらいの間隔で置かれた棚に並ぶのは、いかにも骨董品らしい物から、一見ガラクタに見えるような物まで多種多様だ。けれど決して乱雑に置かれていてはならず、物が溢れていながらもなんとなく秩序があるように感じら

れる。

ひとまず店の人を探そうと、陳列棚の間からそろそろと奥を覗き込んだ。

ここは店で、自分は客なのだからもつと堂々としていればいい。そうは思うものの、店の不思議な雰囲気^{ういきんき}に圧倒されて、思わず息を潜めてしまう。

壁にいくつもかけられた振り子時計はそれぞれ振り子を揺らし、大きな飾り皿や壺の隣では蓄音機^{うきおんき}が威厳たつぷりに存在を主張している。

髪が伸びそうな日本人形や、今にも動き出しそうなほど精巧なビスクドールからは、こちらをじっと見つめているかのような不気味な視線を感じた。

どれもこれも、長い年月を経てきた品々なのだろう。高価そうな骨董品達を壊さないように、細心の注意を払いながら店の奥へ進んでみる。

一歩足を踏み出すたび、まるで怪しい客人を品定めするかのように空気が騒めく。物が囲まれているだけだというのに、息が詰まりそうなほどの威圧感に気圧されそうだ。

「お前、ひとりなんだろ」

その時、地を這うような低い声が耳元で聞こえた気がした。

店主が現れたのかと思ひ、辺りを見回すけれど、店内は相変わらずしんと静まり返っている。

「ひとりぼっちは悲しいだろう。寂しいだろう」

今度は背後から、ノイズがかかったような女性の声が聞こえた。反射的に振り向くが、そこにあるのは骨董品だけで人の姿は見えない。

「あの……どなたかいらっしゃるんですか……」

震えた声で問うものの、返事はない。けれど威圧感のような気配を感じていたのは気のせいではなかった。明らかに、この店にはなにかがいる。ぞくりと背筋が凍るのを感じて、慌てて店から出ようと踵を返した。

「そんなに慌てずともいいだろう。ゆっくりしていくといい」

今度は目の前から老人のような声が聞こえ、その瞬間なにかに躓いて派手に転んだ。咄嗟に棚を掴んでしまい、木の床に倒れ込むと同時に商品がいくつか落ちてきた。

「……っ」

小さく呻きながら体を起こす。顔を上げると、周りに置かれている骨董品が自分の方へ雪崩れ落ちてくるような錯覚に陥って、尻餅をついたままあとずさった。

店内を照らしていた電球がちかちかと点滅したかと思えば、ばちんと音を立てて消え、辺りは暗闇に包まれる。

その瞬間、店にある時計が一齐に鳴った。

それだけじゃない。

触れてもいないのに不気味な音を奏でるオルゴール。

かたかたと音を立てて小刻みに揺れる陶器。

暗闇に徐々に目が慣れてきたところで、僕はさらなる異変に気づいた。

僕の周りを取り囲むように、数え切れないほどの影が佇んでいる。どれもはっきりと見ることはできないが、人影だけでなく猫や狐などの獣のような姿も見える気がした。

「自ら入ってきて、怯えることはないだろう」

「かわいそうな坊や。慰めてあげなくちゃ」

「ふふ……滑稽な姿だなあ」

挑発するような声や、こちらを哀れむような声、小馬鹿にしたような笑い声。様々な声が聞こえてくる。

同時に、いくつもの手がこちらに伸びてきて、驚きと恐怖で声のひとつも上げられない。

迫り来る影に命の危険を感じつつ、腰が抜けて逃げ出すこともできなかった。

そして僕が固く目を閉じた瞬間――

「やめなさい！」

――女性の鋭い声が店内に響いた。

恐る恐る目を開けて、僕はハッと驚く。目の前には、影から僕を守るように女の人
が立っていた。

「この子に手出ししたら許さないわよ！」

その女性は両手を広げ、僕を取り囲んでいる影に向かって啖呵^{たんか}を切る。

暗くて姿はよく見えないが、揺れる長髪と和服のようなシルエツトがぼんやりとう
かがえた。

彼女はどこから現れた？ 何故、僕を庇^{かば}っている？ そもそも一体なにが起きている
んだ？

疑問が次々浮かんで、気分が悪くなりそうなほど頭の中でぐるぐると回り続けて

いる。

「キミは……」

思わず声が漏れていた。そんな僕の声に反応して、彼女はくるとこちらを振り
返る。

「はじめまして、一樹。会いたかったよ」

彼女の嬉しそうな声が降ってくる。

「女、我らと一戦交^{まじ}えるつもりか」

「そっちがその気なら相手になるわよ！ さあ、かかってきなさい！」

影の挑発に、彼女は臆^{おく}することなく不敵に言って、不穏な空気を発するそれらと向
かい合った。

「面白いではないか……」

影達の殺気があるみるみるふくらんでいく。

もはや僕の存在なんておかまいなし。彼女と影が睨^{にら}み合い、それを煽^{あお}るように骨董
品達はがたがたと激しく揺れている。

窓は閉まっているのに風が舞い上がって骨董品が棚から落ちていく。それらが床に

ぶつかる音が聞こえるたび、別の意味で気が遠くなった。
「なにしてる」

場の空気に割って入るように、男性の声が聞こえた。次の瞬間、ぱっと電気が灯つて店の中が一気に明るくなる。

光に目を細めながら声が聞こえた方に視線を動かすと、レジ台の横に長身の男が腕を組んで立ち、僕達を睨みつけていた。

年齢は三十代前半くらいだろうか。がっしりとした体に、はつきりとした目鼻立ち。毛先のはねた硬そうな短髪に顎の無精髭が似合う、所謂ワイルド系の風貌だ。

藍色の着物を身につけ、腕には木製の古い数珠をつけている。店内の雰囲気と相まって、まるで時代劇の中に飛び込んだような感覚に陥つた。

尋ねずともわかる。この男性が店主だろう。

腰を抜かしたままの僕を睨みつけ、彼は無言でこちらに歩み寄ってくる。それを見て、はっと我に返った。

「すみません。あの、僕……怪しい者じゃなくて……」

電気が点いたことで明らかになった店の惨状に、血の気が引いていくのを感じた。

骨董品が床に散乱し、中には割れてしまっている皿や壺などもある。そんな悲惨な状態の店内で腰を抜かしている、見知らぬ人間。

今の僕が、品物を見ていただけなんです、なんて言っても説得力は欠片もない。

大腿で目の前までやってきた男は、相変わらず無言のままじっと僕を見下ろした。

その鋭い眼光に、このまま殺されてしまうのではないかと思うほど身がすくんだ。

硬直して男を見上げていると、彼は僕から視線を外し、僕に迫っていた影の方を睨みつけた。

「お前ら、客になんてしてくれてんだよ。目え離れた隙に調子乗ってんじゃねえぞ」

えらくドスのきいた声に、空気がびくりと震えた。

影達は我先にと方々の骨董品に吸い込まれるように消えていき、大量の気配は一瞬にして消え去った。

「大丈夫？ 怪我はない？」

僕を守ってくれていた女性が、心配して顔を覗き込んでくる。

彼女の見た目は二十代前半くらい。少しタレ目で金色の瞳が印象的な、美しい女性だ。髪は黒くまっすぐで、しゃがむと床についてしまうほど長い。真っ白な着物の襟

を左前にして着ており、死装束を連想させた。

「兄ちゃん、大丈夫か」

「は、はい」

「客なんて滅多に來ないから、まさかいるとは思わなかった。すまねえな」

男は僕の傍にしゃがむ女性をちらりと見たあと、僕に手を差し出した。その手を掴むと、強い力で引き上げられる。

「今の、見えてたのか」

「え……あ……」

突然の質問に、なんのことかと尋ねようとして口を噤んだ。

「見えていた」というのは恐らく、僕を取り囲んでいた影と、今日の前にいる女性のことを指しているに違いない。

「お前もあやかしが見えるんだな」

今度は確信を持つてはつきりと言われ、僕は素直に頷くことしかできなかった。

僕にはこの世ならざるもの——あやかしの姿が見える。

物心ついた頃から当たり前のように見ていたそれらがあやかしと呼ばれる存在だと知ったのは、祖母に引き取られてからだ。祖母もまた、僕と同じようにあやかしを見る人だったのだ。

幼い僕の遊び相手になってくれるあやかしもいたが、彼らのすべてが いいものとは限らなかった。

最近見たものでいくと、先日の必修授業中。僕の肩にわざとぶつかってシャープペンシルを落とし、授業が終わるまで僕の邪魔をし続けたアイツ。

その後昼食を食べに入った食堂で、僕のきつねうどんを羨ましそうに見ていた女もそう。もつとも、害意はなさそうだったけれど。

一部のあやかし達にとって、僕のような見える人間は興味の対象になるらしい。その中には、普通の人間を攻撃して僕の反応を楽しむような悪質なヤツもいる。

あやかしは、無視するに限る。そう学習した僕は、耳を塞ぎ、目を伏せて、彼らをやりと過す術を習得した。

その結果、周囲の人間とも距離ができてしまったものの、そうやってなんとか今までやってきたのだ。

「あの……貴方も、アレが見えるんですか」

「まあな。見えてなきや、こんな仕事やってねえよ。立ち話もなんだから、座れや」
店主に促されるまま移動し、座り心地のいいソファに腰を下ろした。

「ここは……骨董店……ですよ」

「ああ。だが、ここにある物には皆、付喪神^{つくもがみ}つてのが憑^ついてるんだよ」

「つくも、がみ」

「長い年月を経た物に取り憑いたあやかしのことだ。さつき兄ちゃんを取り囲んだたのがそつだよ」

「……そんな危ない物を、お客さんに売りつけてるんですか？」

向かいのソファに座った男に思わず尋ねると、彼は呆気に取られたように瞬^{まばた}きをを繰り返したあと、腹を抱えて大爆笑した。

「いや、まさか！ 客も承知の上で買っていくんだよ」

「……だとしても、あやかしが取り憑いてるんですよね。買手が傷つけられるんじゃないんですか？」

「兄ちゃん。ひとつ勘違いしてねえか？ 誰が憑いてるのは悪いもんだけって言っ

たよ」

取り憑くと言ったら普通、悪いイメージしか持たないだろう。

わけがわからず首を傾^{かし}げると、店主は呆れたように肩を竦^{すく}めた。

「そりゃあ悪いヤツが憑いてるものもあるけどよ。中には持ち主を幸せにしたり、守ったりするいいあやかしが憑いてるものもあるんだぞ」

「はあ……」

「信じてねえって顔だな……ったく、兄ちゃんだつて持つてるだろ」

男は顎^{あご}で僕の隣を示した。その先に視線を動かすと、いつの間にか僕の隣に座っていた、白い着物の女性と目が合った。

「……彼女も付喪神なんですか」

「なんだ、持ち主のくせに気づいてなかったのかよ。なんか依代^{よりしろ}になりそうな物、持つてるだろ？」

男は心底驚いたように言って、目を瞬^{しばた}かせた。

付喪神が憑くほどの古い物——

「思い当たる物なんて、これくらいしか……」

ポケットから懷中時計を取り出して、机の上に置いた。

「へえ……上等な懷中時計だな」

「祖母の形見なんです。祖母が亡くなる間に譲り受けたんですけど、あやかしが憑いてたなんて初めて知りました」

男は身を乗り出して懷中時計を手に取ると、明かりに当てながら品定めするようにじつくりと眺めはじめた。

「祖母が、この時計には守り神が宿っていて、持ち主を幸せにしてくれるって言っていました。それは……本当だったってことですか？」

隣に視線を移して聞うと、白い着物の女性は肩を竦めながら口を開いた。

「さあ、どうだろうね。本人の捉え方次第じゃない？」

やけに明るくはきはきした声だが、まったく答えになっていない。

そんな女性に、男も問いを投げかける。

「しかしお前……持ち主が『見える』相手だとわかっていたんだろ。なんで今まで姿を見せなかったんだ」

「この子が私達と距離を取っているのは知っていたからね。……ずっと隠れて見守っ

てたの」

挨拶が遅くなっちゃってごめんね、と彼女は申し訳なさそうに謝った。

彼女が祖母の言っていた守り神なのだろうか。仮にそうだとしても、彼女が幸運を運んでくれるだなんて、そう易々と信じられるはずがなかった。

とはいえ彼女が身を挺して僕を守ってくれたのは事実だ。助けてくれたことに関しては、素直に礼を述べるべきだろうと思った。

「……助けてくれて、ありがとう」

そう言って頭を下げると、彼女は照れ臭そうにはにかんだ。

「どういたしまして」

「……感動的な流れのところ悪いけど、兄ちゃんはなんの用でここに来たのか聞いてもいいか？」

男に問いかけられて、僕はこの店に入ってきた理由をようやく思い出した。

「実はこの懷中時計、動かないんですよ。時計屋さんで見てもらったんですけど、中はなにも壊れてないって言われて……。でも、ここならなにかわかるかもしれないと思って来ました」

どれ、と男は懷中時計の背面を開け、目を凝らして部品を確認しはじめる。
「ふむ……確かに壊れてる部品はないな」

返ってきた言葉は、他の店で言われたのと同じだった。

この店でも駄目だったか。そう落胆する僕に、思いもよらない言葉が投げかけられる。

「けど……お前はこの時計が動かなくてもいい、って思ってるんじゃないのか？」

言われたことの意味がわからず、僕は男をじっと見つめた。

「だってお前、その付喪神の^{つぐもがみ}こと、まったく信じてないだろ。持ち主が信じていない物が動くわけあるか」

故障の原因として挙げられたのは、あまりにも非現実的なものだった。

しかし祖母が死ぬ瞬間まで、この懷中時計はきちんと動いていた。ということは、彼の分析もあながち間違っていないのかもしれない。

「現状は、付喪神がお前に一方的に片想いしてるって感じだなあ。かわいそーに」

「えー……想いが一方通行なのは辛いなあ」

男の言葉に、白い着物の女性が便乗する。これではまるで、僕が悪者みたいではな

いか。

「……どうしても時計を動かしたいなら、名前をつけることだな」

「名前？」

これまた意味不明な発言に、僕は再び首を傾^{かた}げる。そんな僕を無視して、名前がないんだろ、と男が尋ねれば、白い着物の女性は頷いた。

「懷中時計の裏に、僕の名前を書けども言うんですか」

「馬鹿か。お前が、その付喪神に名前をつけるんだよ。いいか？ 名づけるってことは、その存在を特別なものと認めるってことだ。名前には強い力があるんだぞ」

「いきなりそんなこと言われたって……」

隣から期待の眼差しを痛いほど感じた。

けれど僕はすっかり混乱してしまって、考えれば考えるほどなにも思い浮かなくなっていく。

「名前は大切だからな。そんな焦って決めずとも、時間をかけてじっくり考えろといさ」

「いい名前、つけてね！ 楽しみにしてるから」

期待を表すように女性から両手を強く握られて、僕は遠い目をしながら頷くことしかできなかった。

「――それでよ、話は変わるんだけど」

男はにつこりと満面の笑みを浮かべながら、店の陳列スペースを指さした。

「あれ、どうしてくれるわけ？」

ゆつくりとそちらを見た僕は、あ、と間の抜けた声を漏らした。

すっかり忘れていたが、そこには床に物が散乱した、悲惨な光景が広がっていた。

「お前の付喪神が喧嘩売ってくれたおかげで、この有り様だ」

僕は被害者で、巻き込まれたただだ。だというのに、責任を取れというのもおかしい話に思える。

しかしなにも知らなかったとはいえ、店の人がいないのに勝手に奥まで入ってしまった僕にも多少の非はある。それに、転んだ際に僕が壊してしまった物も少なからずあると思い出した。

「……とは言っても、兄ちゃんに悪気があったわけでもないし、なにか悪さをしようとしたわけでもない。事実、店を荒らしたのはその名無しの付喪神だもんなあ？ よ

し。この時計をくれるなら、チャラにしてやってもいいぞ」

男が時計を握りしめたまま、にやりと笑う。

どうしたものかと視線を彷徨^{さまよ}わせると、不安そうに僕を見つめている女性と目が合ってしまった。

僕よりも大人びて見える女性の手は、怯^{おび}えたように小刻みに震えている。

ああ、そうか。今のところあの時計の持ち主は僕だ。女性の存在を完全に受け入れただけではないものの、彼女はそんな僕しか頼る相手がいない。

もし僕がこのまま時計を手放したら、女性はあの山のような骨董品の中のひとつになつてしまう。いつ訪れるかわからない次の持ち主を、ひとり寂しくここでじっと待つことになるのだろう。

そもそも店を荒らしてしまったのは、女性が懸命に僕を守ってくれようとした結果なのだ。懐中時計は祖母が僕に残してくれた物でもある。故郷も家族も失った僕に、最後に残った大切な形見――

たとえ脅されようとも、はいわかりました、と簡単に手放すわけにはいかなかった。

「……その時計だけは、渡せません」

「なら、どうする？」

男はそう言つて目を細めたが、ここで折れるわけにはいかない。拳を強く握りしめ、彼を見つめ返した。

「……僕が、弁償します」

その言葉を聞くなり男はさらに笑みを深くして、軽快な音を立てながら電卓を叩きはじめた。

「ざつと見積もつて、これくらいだぞ？」

「……なっ」

差し出された電卓に表示されている数字を見て、思わず声を失った。

何度も何度もゼロの数を数えるが、いくら確かめても金額は変わらなかった。

両親が残してくれた貯金を崩せば、どうにか払えるかもしれない。しかし、そうすると大学には通えなくなってしまう。

こんなところで大学を中退するわけにはいかないし、かといって一度払うと言つたものを取り消すのも、絶対に嫌だった。

「どうする？ この時計、手放すか？」

チェーンをつまみ、時計を振り子みたいに揺らしながら、男がこちらを試すように言う。白い着物の女性は、不安げに僕と彼の顔を交互に見ていた。

「今すぐには払えません。でも、何年かかっても必ずお返しします。ですから、時間をくれませんか」

そう言つて頭を下げる。まるで闇金に金を借りているかのような気分になった。やがて頭上からくすりとおかしそうな笑い声が降ってくる。

「なあに、今すぐ払えとは言わねえよ。金がねえなら体で払え。お前ならあやかしも見えるし、ちょうどいいからウチで働けよ」

「……あの、僕の意味は」

「金、払えないんだろ？ 安心しろ。利子も延滞金もなしで、少ないがバイト代もいくらか手元に残してやる。都合のいい雑用係が欲しかったんだ」

謀^{はか}られた——この男、最初から僕をこの店で働かせるつもりだったのだ。

そうわかつて、もはや僕に選択の余地はない。

まるで悪魔と契約してしまったかのような気持ちになり、全身に悪寒^{おかん}が駆け巡つて脂汗^{じあせ}がじわりと滲み出てきた。

「俺はこの霧原骨董店の店主、霧原隆道^{たかみち}。兄ちゃんの名前は？」

「……高峰、一樹です」

声を絞り出すようにして名乗ると、目の前の悪魔は口角を上げてにんまりと笑った。
「くくくつ……明日からよろしく頼むな。高峰一樹君」

こうして僕は、半強制的にこの『霧原骨董店』でアルバイトをすることとなったのだった。

立ち読みサンプル はここまで

第二話 テデイベア

《頼みたい仕事がある。学校帰りに店まで》

本日最後の授業の終了五分前——珍しくスマートフォンが震えたので確認してみると、隆道さんからそんなメッセージが届いていた。

付喪神^{つくもがみ}が憑いた特殊な骨董品を扱う店——『霧原骨董店』でアルバイトをはじめ、もうすぐ一週間。

僕は週に四日アルバイトに入ることになり、土日は朝から、平日は授業が終わるとすぐ店に向かっている。

出勤日は店の営業日や隆道さんの予定に合わせて一ヶ月ごとに決めることになっていて、先日決定したスケジュールだと今日は休みだ。だというのは、僕に予定がないことを見透^{みす}かしているかのようなこのメッセージ。